

## 「明治天皇とその時代」

— 明治天皇崩御百年・明治天皇御生誕百六十年 —

企画・編集委員 櫻井治男

本年（平成二十四年）は、明治天皇が崩御されて百年、そして明治天皇の御生誕百六十年という、奇しくも大いなる感慨の節を迎えるところとなった。国民にとり明治という時代の持つ意味、そしてその時代を経験し、今上陛下の御代へとつながる日本の今を省察する重要な機会が、私たちに示されたといえよう。

そこで、本学会では、本年度紀要について、特集テーマを「明治天皇とその時代―明治天皇崩御百年・明治天皇御生誕百六十年」として編み、読者のお手元に届けることとした。ご寄稿・投稿いただいた多くの執筆者のお蔭により、充実した内容となったこと、まず感謝申し上げます。

巻頭言に小堀桂一郎先生の玉稿を掲げ、シンポジウム記録、特集論文五編、論文八編、誌上講演一編、講演録二編、随想三編、書評論文一編、書評、そして図書紹介二十点という内容で、構成スタイルは従前に従い、論文についても編集委員における査読を経て掲載した。

七月十四日（土）に行った公開シンポジウムは、國學院大學 研究開発推進センターとの共催事業で「明治天皇とその時代」をテーマに、お二人の先生方の基調講演と、引き続き行われた

パネルディスカッションの記録を取めた。会場一杯となる参加を得、伊藤之雄先生の穏やかな語りと武田秀章先生の熱い語りにより、明治天皇が近代日本における革新と伝統とを体現して行かれるさまが、聴衆に伝わったのではないかと思う。また、堀口修、ジョン・ブリン両先生のコメントを通して、この時代を深く考える機会を与えていただいたと言えよう。

特集論文、論文、誌上講演、講演録はいずれも、「明治天皇とその時代」の理解が如何に必要であり、明らかにされるべきテーマが多いかの一端を垣間見ることができよう。明治天皇が崩御されて百年の時点より、その時代を対象化し、精神史を大局的に捉える重要性をはじめ、国家制度、教育の基本から、その背景に流れる観念、時代の新たな動きなど学術研究の意義を高めていただいている。

また、岡野弘彦先生、ドナルド・キーン先生には、ご多忙のなか明治神宮とのご縁のなかで随想をお寄せいただいたこと、感謝を申し上げます。

書評・図書紹介が果たす役割は、ネット社会の現代でも大きい。それが研究上の論争を喚起し、学術研究を高めることへとつながることも予想される。なによりも、当学会において、注目される書籍を取り上げていることは、一つのまとまりと関連付けにおいてのことであり、学会の果たす役割の重要な領域である。

本紀要の編集にご尽力いただいた事務局の皆さんに感謝する次第である。

（皇學館大学社会福祉学部長・教授）